

# 英語における優位条件の緩和について

石岡 精三\*

Mitigation of Superiority Condition in English

Seizo ISHIOKA\*

Key words : D(iscourse)-Linking, Multiple Interrogative, Scope Position

## 0 . はじめに

( 1 ) のような多重疑問文 ( Multiple Interrogative ) 用例で観察される優位条件 ( Superiority Condition ) は、ある一定の条件下でその適用が緩和されるように見える。( 2 ) は、談話に連結された Wh 要素 ( Discourse-Linked Wh 要素、以下で D-Linked Wh 要素 ) が生起する派生である。この場合、不適格である ( 1b ) に対応する派生 ( 2b ) が適格と判断される。あるいは ( 3b ) において確認されるように、優位条件違反が、更に元の位置 ( in-situ ) の Wh 要素 ( 以下で、Wh-in-situ 要素 ) の付加によって救済される (( 3b ) において、Wh-in-situ 要素 ( *to whom* ) が付加されている )<sup>1)</sup>

( 1 ) a. Who t sees what?  
b.\*What does who see t?

( 2 ) a. Which professor t saw which student? ( Uriagereka 1999: ( 9c ) )  
b. Which student did which professor see t? ( Uriagereka 1999: ( 9d ) )

( 3 ) a.\*What did who give t to Mary? ( Pesetsky 2000: p.17, ( 33a ) )  
b. What did who give t to whom? ( Pesetsky 2000: ( 33b ) )  
c.?Who did who give what to t?

本稿では、上の用例すべてにおいて優位条件が適用されると考える。還元すれば、( 2b ) と ( 3b ) の派生は、何らかのプロセスによりこの優位条件の要請を満たすと想定される。( 2b ) において、直接目的語 Wh 要素 ( *which student* ) が

---

原稿受付：平成16年5月20日

\*長岡技術科学大学語学センター

主語 Wh 要素 (*which professor*) よりも「優位」であると主張する。(3b) においては、統語移動した Wh 要素 (*what*) と Wh-in-situ 要素 (*who*) の Pairing が、統語移動した Wh 要素 (*what*) と Wh-in-situ 要素 (*to whom*) の Pairing よりも「優位」であると考えられる。

本稿は、以下のように構成される。第1節において、優位条件の発動プロセスを説明する Pesetsky (2000) と Hornstein (1995) の概要と、それぞれの問題点が提示される。第2節では、優位条件を説明する本稿の論法が提示され、優位条件の発動プロセスと一見したところ当該条件の適用停止と思われる用例に考察が加えられる。優位条件を説明する本稿の論法は、統語移動する Wh 要素と 普遍数量詞 (Universal Quantifier) である [*every* + NP] から形成される疑問文に対する「ペア列挙」の読み (Pair-List Reading) をもつ返答文形成の可否を決定する論法に類似するものである。第3節では、スペイン語における優位条件と「ペア列挙」の読みに若干の検討を加える。結びを構成する第4節では、幾つかの問題点が指摘・検討され、その打開策が提示される。

## 1 . Pesetsky (2000) と Hornstein (1995) の概要と問題点

本節において、優位条件の説明を目指す Pesetsky (2000) と Hornstein (1995) の概要に検討が加えられ、それぞれの予測体系に関する問題点が指摘される。Pesetsky (2000) の説明法において注目すべきは、従来 LF 移動すると考えられていた Wh-in-situ に関係する要素が統語移動すると前提されている点である。Hornstein (1995) の説明法は Chierchia (1992, 1993) に基づくものであり、優位条件が弱交差 (Weak Crossover) に還元される。

### 1 .1 Pesetsky (2000) の概要と問題点

Richards (1998) と同様に、多重指定部 (Multispecifier) からなる補文標識 (Complementizer) ( $C_{m-spec}$ ) が想定される。この C に複数の素性 [+wh] が付与される。つまり、複数の Wh 要素のそれぞれは、単一の C の投射内に生成される Spec 位置へ移動する (照合 (Checking))。この移動様式を、英語用例 (1a-b) に並行すると想定されているブルガリア語の用例 (4a-b) で検討する。

(4) a. Koj kakvo vižda? (Pesetsky 2000 : p.22, (43a))

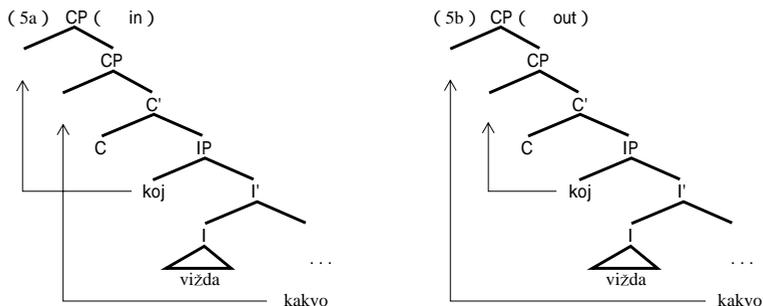
who what sees

[ cf. Who sees what? ]

b.\*Kakvo koj vižda? (Pesetsky 2000 : p.22, (43b))

[ cf. \*What does who see? ]

Attract Closest (AC) により, 最上位に基底生成された Wh 要素 (*koj* “who”) が最初に照合に参加する。より下位に生成される Wh 要素 (*kakvo* “what”) は Outer Spec(C) でなく, Inner Spec(C) へ移動する。これは, 移動する要素に課される条件 (最短移動 (Shortest Move)) による ((4) の派生構造である (5) を参照されたい)。つまり, 構造上より下位に位置する Wh 要素は, たくし込み (tucking in) の様式で移動することになる。



Pesetsky (2000) では, (4) で観察された Wh 要素自体の移動による照合だけでなく, 形態素性, つまりゼロ範疇としての素性 [ +wh ] の移動による素性照合が仮定される (当該素性が C 位置へ主要部移動する)。Cm-spec に対する規制 (6) と英語の発音規則 (7) を想定することにより, (1a) と (1b) の相違が説明されることになる。<sup>2)</sup>

(6) Multiple-specifier requirement of Cm-spec (Pesetsky 2000 : p.41) :

Cm-spec requires more than one wh-specifier.

(7) Pronunciation rule (for English) (Pesetsky 2000 : p.8) :

- a. The first instance of wh-phrase movement to C is *overt*, in that wh is pronounced in its new position and unpronounced in its trace position.
- b. Secondary instances of wh-phrase movement to C are *covert*, in that wh is pronounced in its trace position and unpronounced in its new position.

(1a) の適格性は, (4a) を説明する論法によって説明される。より上位に生成される Wh 要素 (*who*) が Spec(C) へ移動する。次いで, より下位に生成された Wh 要素 (*what*) が Inner Spec(C) へ移動する。発音規則 (7b) により, Wh 要素 (*what*) は, その痕跡 (Trace) 位置で発音される (従来 LF 移動すると考えられているこの Wh 要素 (*what*) が, 統語移動 (S 移動) すると前提されている

点に留意する必要がある)。この派生は、Cm-spec に対する規制(6)を満たす。(1b)において、最初にゼロ範疇としての素性 [+wh] が C へ移動する。次いで、より下位に生成された Wh 要素 (*what*) が Spec(C) へ移動する(発音規則により、当該 Wh 要素が発音される)。単一の Wh 要素が Spec 位置へ移動するため、この派生は規制(6)により排除される(不適格と予測される)。(1b)の非文性を説明する論法は、D-Linked Wh 要素が生起する(2b)を不適格と予測する(問題点)。この問題を打開すべく、Pesetsky (2000 : p.41) は、D-Linked Wh 要素に対応するゼロ範疇素性 [+wh] が移動する場合、規制(6)が適用されないと想定する。<sup>3)</sup>

複数の Wh-in-situ 要素が関与する用例(3b)では、最高位に生成された Wh 要素 (*who*) が Spec(C) へ移動することなしに規制(6)を満たす。Attract Closest (AC) に合致するように、最高位に生成された Wh 要素の素性が C へ移動するだけでよい(当該 Wh 要素は、元の位置 (in-situ) で発音される)。残りの Wh 要素 (*what, whom*) が C の Spec 位置へ移動する。前者の Wh 要素は、移動先で発音される。後者のそれは、痕跡位置で発音される。つまり、(3b)が適格と予測されることになる。最小遵守の原理 (Principle of Minimal Compliance) によれば、一度 Attract Closest (AC) が遵守されると、その以降の移動はこの AC に従う必要はない。つまり、(3b)において素性の移動に参加する要素以外の Wh 要素 (*what, whom*) の後者が移動先で発音される派生も適格と予測される(前者の Wh 要素は、痕跡位置で発音される)。つまり、(3c)も基本的に適格と予測される。<sup>4)</sup>

上でその概略が示された Pesetsky (2000) の論法は、(8)と(9)の相違を適格に説明可能である。しかしながら、(10a-b)もまた共に適格と予測される(問題点)。

- (8) a.\*I'd like to know where who hid it (Kayne 1983 : (34a))  
b.\*I'd like to know what who hid there (Kayne 1983 : (34b))

- (9) a.?I'd like to know where who hid what (Kayne 1983 : (35a))  
b.?I'd like to know what who hid where (Kayne 1983 : (35b))

- (10) a.\*I'd like to know where who said (that) what was hidden (Kayne 1983 : (41))  
b.\*Who spoke when how? (Reinhart 1998 : (29b))

## 1.2 Hornstein (1995) の概要と問題点

Hornstein (1995) は、優位条件を弱交差 (Weak Crossover) に還元する。最初

に、Wh 要素と普遍数量詞 (Universal Quantifier) が関与する疑問文に対するペア列挙の返答文が生み出されるプロセスについて考えている。Chierchia (1992, 1993) に基づき、Wh 要素が機能的に解釈される。LF 構造において機能指標 (Function-Index) である  $i$  と項指標 (Argument-Index) である  $j$  を想定する。機能指標は Spec 内の Wh 要素に束縛される。項指標は直接 C 統御する要素と同一であり、束縛代名詞 (Bound Pronoun, 以下で pro と表記する) として機能する。ペア列挙の返答文を許容しない (11b) の LF 構造は、弱交差 (13) によって排除される (代名詞 (proj) は右方に生起する変項 (Variable) である  $t_j$  にリンクされている)。ペア列挙の返答文を許容する (11a) に対応する LF 構造では、この種の違反が観察されない (LF における数量詞繰り上げ (Quantifier Raising) が前提されている点に留意されたい)。

- (11) a. What<sub>i</sub> did every man say  $t_i$ ? [<sup>ok</sup>Pair-List Reading | Hornstein 1995 : p.112, (47a)]  
 b. Who<sub>i</sub>  $t_i$  said everything? [\*Pair-List Reading | Hornstein 1995 : p.112, (47b)]

- (12) a. [ CP What<sub>i</sub> [ every man ] [ IP  $t_j$  say [ proj  $t_i$  ] ] ] ] ]  
 b. [ CP Who<sub>i</sub> [ everything ] [ IP [ proj  $t_i$  ] said  $t_j$  ] ] ] ] ]

- (13) a. Weak Crossover (Hornstein 1995 : p.100)  
 A pronoun cannot be linked to a variable on its right.  
 \*Q... pronoun... variable...  


ペア列挙の解釈を説明する論法が、優位条件の説明に移行される。(12)の構造においてペア列挙の読みを生み出す要素 (Generator) としての普遍数量詞 (*every man*) が統語移動する Wh 要素に対応すると考える。機能的に解釈される表現として、Wh-in-situ を想定する。これにより、(1a-b) の LF 構造として以下の (14a-b) が指定される (項指標のみ表示する)。(1b) に対応する構造 (14b) は、弱交差によって排除される。

- (14) a. [ CP who<sub>j</sub> [ IP  $t_j$  sees [ proj thing [ =what ] ] ] ] ] ]  
 b. [ CP what<sub>j</sub> [ IP [ proj person [ =who ] see  $t_j$  ] ] ] ] ] ]

D-Linked Wh 要素が生起する (2b) のタイプ適格性は、どのように説明されるであろうか。Wh 要素が Generator として機能するためには、当該 Wh 要素が Spec (C) へ移動する必要がある。D-Linked Wh 要素の場合は、それが基底生成される元の位置で Generator として機能し、同時に機能的に解釈される要素を構

成すると仮定される (Hornstein 1995 : p.133)。例えば, (15a) の LF 構造として (15b) が想定される (弱交差の違反することはない)。

- (15) a. Which song did which man sing? (Hornstein 1995 : p.134, (45a))  
 b. [ CP [ IP which man ] sing [ proj song ] ] (Hornstein 1995 : p.134, (45b))

上で略述した Hornstein (1995) の論法は, 以下のように本稿の (3b) のタイプの適格性を説明する。(16b) に対応する派生構造 (16c) 矢印で示されるように, 弱交差に抵触しない連結 (Linking) が存在する。

- (16) a. What did who buy there? (Hornstein 1995 : p.143, (81a))  
 b.(?) What did who buy where? (Hornstein 1995 : (81b))  
 c. [ CP what<sub>tj</sub> [ IP [ proj person I = who ] buy<sub>tj</sub> [ proj place I = where ] ] ]
- 

Aoun and Li (2003) でも指摘されているように, (16b) の適格性を説明する Hornstein (1995) の論法は, 統語移動する Wh 要素が最下位に生成される要素である派生を非文と予測する。それは, 変項 (variable) が, 機能的に解釈される 2 つの Wh 要素の右方に生起するためである。しかしながら, このタイプの派生は適格と判断される (Hornstein (1995) の問題点)。適格と判断される (17b) に対応する構造 (17c) において, 弱交差違反を回避する連結が存在しない。

- (17) a. What<sub>tj</sub> did who persuade whom to buy<sub>tj</sub> (Pesetsky 2000 : p.49, (89c))  
 b. Who<sub>j</sub> did who persuade whom to dance with<sub>tj</sub>? (Aoun and Li 2003 : p.265, fn.3)  
 c. [ CP who<sub>j</sub> [ IP [ proj person I = who ] persuade [ proj person I = who ] CP to dance with<sub>tj</sub> ] ]
- 

## 2. 代替理論

### 2.1 ペア列挙の読み (Pair-List Reading)

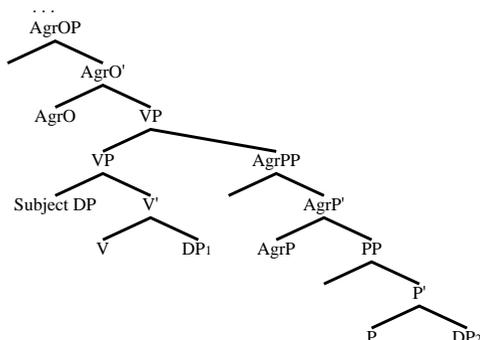
以下の用例からも判明するように, このペア列挙の読みは一定の条件下で許容される。一定の構造上の条件が, このペア列挙の読みの可否を左右すると考えられる (本稿では, [ every + NP ] タイプの普遍数量詞と Wh 要素が生起する派生に検討を加える)。この構造上の条件は, LF 構造における普遍数量詞と Wh 要素それぞれの生成位置と Spec(Agr) などの位置の C 統御関係に還元される (本稿では, これらの位置を Scope Position (作用域位置) と呼ぶことにする)。具体的には, 普遍数量詞の Scope Position が Wh 要素の Scope Position を C 統御する



が提唱する構造 (22) を想定することにより説明可能となる。

- (21) a. I read something to everyone (ambiguous X Stroik 1996 : p.45, (34b))  
 X (something > everyone) Y (something > everyone)  
 b. John sang something for every couple (Hornstein 1995 : p.173, (86b))  
 X (something > every couple) Y (something > every couple)

(22) Structure of Dative Constructions



Hornstein (1995) と同様に、与格を構成する前置詞の目的語 (DP<sub>2</sub>) は、照合 (Checking) に参加するため、当該前置詞句の直接上位に生成された Agr の Spec 位置へ移動すると考える (本稿では、この機能的範疇 Agr を AgrP と呼ぶ。この AgrPP は、VP に右方付加した位置に生成される)。(21) における X の作用域関係は、DP<sub>1</sub> の Scope Position である Spec(AgrO) が、基底生成された位置、あるいは Spec(AgrP) を C 統御することにより説明される (基底生成された位置にある DP<sub>1</sub> が Spec(AgrP) と DP<sub>2</sub> の生成位置を C 統御することはない)。Y の作用域関係は、どのように導き出されるであろうか。DP<sub>2</sub> の生成位置が Spec(AgrO) と DP<sub>1</sub> の生成位置を C 統御することはない。この関係は、Spec(AgrP) の位置が DP<sub>1</sub> の生成位置を C 統御することにより説明される (AgrP が機能的範疇と想定されている点に留意されたい)。

上の略述した作用域の画定プロセスと、普遍数量詞と Wh 要素の共起がもたらすペア列挙の読みはどのような関連をもつのであろうか。すでに述べたように、普遍数量詞の Scope Position が Wh 要素の Scope Position を C 統御する場合に限り、ペア列挙の読みが許容されると想定されている。ペア列挙の読みにおいて、何れかの Agr の Spec 位置が、Scope Position としての機能を停止すると考えてみよう。AgrS 以外に AgrO のみが生起する (18) と (19) において、Spec

(AgrO) が Scope Position として機能を失うと考える。つまり、基底生成された位置と Spec(AgrS) が Scope Position を構成する。目的語要素の Scope Position が主語要素の Scope Position を C 統御することはない(逆に、主語要素の Scope Position が目的語要素の Scope Position を C 統御する)。つまり、(18a) の疑問文がペア列挙の読みを許容する。

AgrS 以外に AgrO と AgrP が生起する与格構文では、どのような状況が観察されるであろうか。(23)において、DP<sub>2</sub> に対応する数量詞の Scope Position が DP<sub>1</sub> に対応する Wh 要素の Scope Position を C 統御できない((24)では、この C 統御が可能である)。(23)と(24)において、DP<sub>1</sub> に対応する Wh 要素の Scope Position が DP<sub>2</sub> に対応する数量詞の Scope Position を C 統御可能である。この状況は、(23)の判断が下される話者グループにおいて Scope Position として機能しない要素として Spec(AgrP) が指定されると想定することにより説明される(Spec(AgrO) が Scope Position となる)。(24)の判断が下される話者グループでは、一つの派生において Spec(AgrO) と Spec(AgrP) のどちらか一方が Scope Position として機能すると考えられる。(24a)では、Spec(AgrP) が Scope Position となる(Spec(AgrO) が Scope Position として機能することはない)。(24b)では、Spec(O) が Scope Position として機能する(Spec(AgrP) は Scope Position を構成しない)。

- (23) a. I know what you gave to everyone for Xmas. [ \*Pair-list ]( Hornstein 1995 : p.115, ( 63b ) )  
 b. What did you give to everyone? [ \*Pair-list ]( Williams 1988 : ( 7b ) )  
 c. Who did you give everything to? [ <sup>ok</sup>Pair-list ]( Williams 1988 : ( 7a ) )
- (24) a. What did you read to everyone? [ <sup>ok</sup>Pair-list ]( Stroik 1996 : p.45, ( 35a ) )  
 b. Who did you read everything to? [ <sup>ok</sup>Pair-list ]( Stroik 1996 : p.45, ( 35b ) )

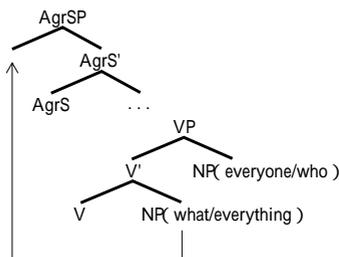
(23) の話者グループに対応し、与格構文における Spec(AgrP) の方が Scope Position として機能する話者グループの存在も予想される(この話者グループでは、与格構文における Spec(AgrO) が Scope Position を構成しない)。Beghelli (1997) の用例が、この話者グループに属すと考えられる((25a) が基本的にペア列挙の読みを許容する。(25b) では、この読みが排除される)。しかしながら、同じく Beghelli (1997) の用例で D-Linked Wh 要素が生起する(26)では、(25)と異なる状況が観察される((25a) と(26a) が好対照をなす)。このグループの特殊性は、(26)における Spec(AgrP) が Scope Position としての機能を失うと考えることにより説明されるであろう(D-Linked Wh 要素が介在する場合に限り)。<sup>6)7)</sup>

- (25) a. What did you show to every man? [ ?Pair-list 【 Beghelli 1997 : ( 3a )  
 b. To whom did you show every picture? [ ??Pair-list 【 Beghelli 1997 : ( 3b )
- (26) a. Which book did you show to every man? [ \*Pair-list 【 Beghelli 1997 : ( 5c )  
 b. To which man did you show every picture? [ \*Pair-list 【 Beghelli 1997 : ( 5d )

本節の最後に、心理動詞 ( Psychological Verb ) の用例に検討を加える。以下の用例からも判明するように、( 18 - 19 ) と反対の分布が観察される。本稿では、便宜上、心理動詞の構造として、Belletti and Rizzi ( 1988 ) の提唱する ( 28 ) を想定する ( AgrO の投射の表示は割愛してある )。本稿で採用される C 統御の定義からして、より高位の VP に経験者要素が生成され、主題要素はより下位の異なる VP に生成されると想定する必要がある ( 類似する構造に関しては、Franco and Huidobro ( 2003 ) を参照されたい )。

- (27) a. What worries everyone? [ <sup>ok</sup>Pair-list 【 Kim & Larson 1989 : ( 6a )  
 b. Who does everything worry? [ \*Pair-list 【 Kim & Larson 1989 : ( 6b )

(28) ( for ( 27a-b ) )



( 27 ) の相違は、心理動詞における Spec( AgrO ) と Spec( AgrS ) が Scope Position として機能しないと前提することにより説明される ( 基底生成された位置が問題となる )。経験者 ( Experiencer ) 要素の生成位置が主題 ( Theme ) 要素の生成位置を C 統御する構造が想定される。( 27a ) において、経験者である数量詞 ( *everyone* ) が主題を構成する Wh 要素 ( *what* ) を C 統御する (( 27b ) では、この C 統御条件が満たされない)。しかしながら、Chierchia ( 1993 ) の用例 ( 29c ) が示すように、( 27b ) に対応する派生においてもペア列挙の読みが許容される話者グループが存在する。この話者グループでは、Spec( AgrS ) が Scope Position として機能すると考えられる。これにより、( 29 ) に対するペア列挙の読みが可能となる。<sup>8)</sup>

- (29) a. What worries everyone? [ <sup>ok</sup>Pair-list ] ( Chierchia 1993 : ( 90 ) )  
 b. The B-exam worries Bill, the language requirement worries Mary,... ( Chierchia 1993 : ( 90b ) )  
 c. Who does every conference worry the most? [ <sup>ok</sup>Pair-list ] ( Chierchia 1993 : ( 93a ) )  
 d. NELS worries Bill, WCCFL worries Mary,... ( Chierchia 1993 : ( 93b ) )

## 2.2 優位条件とその緩和プロセス (1)

多重疑問文において適用される優位条件は、統語移動する Wh の Scope Position が Wh-in-situ の Scope Position を C 統御する条件に換言される。上で観察したペア列挙読みの場合と同様、何らかの Agr の Spec 位置が Scope Position としての機能を停止すると想定される。Spec( AgrS ) と Spec( AgrO ) が生成される派生では、Spec( AgrO ) が Scope Position として機能することはない。これにより、本稿の ( 1 ) の相違が説明される ( 便宜上、当該用例を再掲する )。

- ( 1 ) a. Who t sees what?  
 b.\*What does who see t?

目的語 Wh 要素 ( *what* ) の Scope Position が主語 Wh 要素 ( *who* ) の Scope Position を C 統御することはない ( 主語要素の Scope Position が目的語要素の Scope Position を C 統御する )。これにより、( 1b ) の非文性が説明される。次に、Spec( AgrS ) 以外に Spec( AgrO ) と Spec( AgrP ) が生起する派生について考える。このタイプにおけるペア列挙の読みでは、異なる話者グループの存在が確認された。多重疑問文では、一律に Spec( AgrP ) が Scope Position として機能しない ( 基底生成された位置に加え、Spec( AgrS ) と Spec( AgrO ) が Scope Position を構成する )。このことは、( 30 ) と ( 31 ) の用例によって例証される。Spec( AgrP ) が Scope Position を構成しないため、与格 PP 内にある Wh 要素の Scope Position として指定されるのは、当該要素の生成位置である ( 与格構文の構造 ( 22 ) を想起されたい )。この Wh 要素の生成位置は、目的語 Wh 要素の Scope Position ( 当該要素の生成位置と Spec( AgrO ) ) を C 統御することはない ( ( 30a ) と ( 31a ) が不適格と予測される )。逆に目的語 Wh 要素の Scope Position である Spec( AgrO ) が与格 PP 内にある Wh 要素の Scope Position を C 統御する ( ( 30b ) と ( 31b ) が適格と予測される )。

- ( 30 ) a.\*Who did Mary read what to? ( Stroik 1996 : p.95, ( 45b ) )  
 b. What did Mary read to whom ( Stroik 1996 : p.95, ( 45a ) )
- ( 31 ) a.\*Who( m ) did you send what/which check to? ( Hornstein 1995 : p.127 )  
 b. What/which check did you send to who? ( Hornstein 1995 : p.127 )

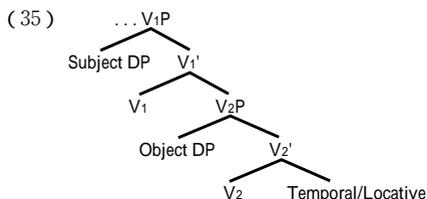
その一方で、与格 PP 内の Wh 要素の代わって当該与格 PP 全体が統語移動する派生の文法性判断では、揺れが観察される。(32)では、この派生が適格と判断される((33)では、この派生が不適格と判断される)。与格 PP は、目的語 Wh 要素の生成位置と Spec(AgrO) を C 統御する。つまり、(32a-d) と (33a-b) のすべてが適格と予測される。それでは、(33a-b) の非文性はどのように説明されるであろうか。与格 PP が AgrP' の右肢 (AgrP の姉妹位置) に生成される点に留意されたい。仮に、右肢位置から左方向への C 統御 (右肢左方 C 統御) が許容されるグループと許容されないグループの存在を仮定してみよう。(32)がこの右肢左方 C 統御が許容されるグループである((33)では、この右肢左方 C 統御が許容されない)。これにより、(33a-b) が優位条件によって排除される。<sup>9)</sup>

- (32) a. To whom did Lou give what? (Stroik 1996 : p.102, (64a))  
 b. To whom did John give what? (Freidin 1995 : fn.15)  
 c. To whom did you give what? (Fiengo 1980 : p.123, (16b))  
 d. For whom did John buy what? (May 1985 : p.130, (32a))  
 e. What did you buy for whom? (May 1985 : p.130, (32b))

- (33) a.\*To whom did you send which check? (Aoun and Li 1996 : p.31)  
 b.\*To whom did you give what (Kuno & Robinson 1972 : (3.2-d))

ここで、指示的付加語 (Referential Adjunct) Wh 要素 (*when, where*) が生起する用例に検討を加える。以下の (34) が示すように、少なくともこのタイプの数量詞 (*everyday*) の Scope Position (生成位置) は、目的語要素の Scope Position を C 統御できない((34)では、Spec(AgrO) が Scope Position として機能しない点に留意されたい)。逆に、目的語要素の Scope Position が付加語要素の Scope Position を C 統御しなければならない。本稿では、部分的に Stroik (1996 : p.22) の VP Shell 構造 (35) を想定する (主語要素と同様、目的語要素が Spec(V2) に生成され、指示的付加語が V2 の姉妹位置に生成される)。

- (34) a. When did Mary see everyone? [<sup>ok</sup>Pair-list I Stroik 1996 : p.22, (25a))  
 b. Who did Mary see **every day**? [\*Pair-list I Stroik 1996 : p.22, (25b))



数量詞である指示的付加語（例えば, *everyday*）の生成位置として V<sub>2</sub> の姉妹位置が想定される（本稿で採用される C 統御定義によれば, 目的語の生成位置と指示的な付加語要素の生成位置は, お互いを C 統御する（註 5））。(34)において, X<sup>0</sup> 範疇の右肢要素による左方 C 統御が許容されないと考えられる（この種の左方 C 統御が許容される話者グループの存在も後に確認される）。これにより, (34a) と (34b) の相違が説明可能となる。同様の論法により, 主語 Wh 要素が共起する用例 (36) から (38) も説明される。

- (36) a. Who saw Aida where? (Hornstein 1995 : p.126, (13a))  
 b. Who saw Aida when? (Hornstein 1995 : p.126, (13b))  
 c. I'd like to know who hid it where (Kayne 1984 : p.176))
- (37) a.\*When did who see Peter? (Erteschik-Shir 1997 : p.194, (31a))  
 b.\*Where did who buy a present? (Erteschik-Shir 1997 : p.194, (31b))  
 c.\*I'd like to know where who hid it (Kayne 1983 : (34a))
- (38) a.\*When did Mary read what to Lou? (Stroik 1996 : p.97, (50a))  
 b.\*On which weekend did Mary read what to Lou? (Stroik 1996 : p.97, (50a'))

主語 Wh 要素の Scope Position は常に指示的な付加語 Wh 要素の Scope Position を C 統御する（これとは逆の C 統御関係は成立しない）。これにより, (36) と (37) の相違が説明可能となる。既に述べたように, Stroik が属す話者グループでは, X<sup>0</sup> 範疇の右肢要素による左方 C 統御が許容されない。これにより, (38a-b) が非文と予測されることになる。本稿の仮説群は, (38) に対応して目的語 Wh 要素が統語移動する派生を適格と予測する。この予測は, 以下の (39a) によって例証される。<sup>10)</sup>

- (39) a. What did Mary read to Lou on which weekend? (Stroik 1996 : p.97, (49a))  
 b. Who did Mary read the Bible to on which weekend? (Stroik 1996 : p.97, (49b))

しかしながら, この生成位置を一般的に指示的な付加語 Wh 要素に拡張することには問題がある。目的語 Wh 要素が共起する用例が問題を引き起こす。この用例では, Spec(AgrO) が Scope Position として機能しないため, (40b) と (40d) が適格と予測される。(40a) と (40c) が不適格と予測される（問題点）。同様に, 指示的な付加語 Wh 要素の両方が生起する (41) もまた問題を引き起こす ((41a-b) の双方が適格と判断される)。与格構文である (42) もまた, 問題を引き起こす ((42) と上の (38) の非文性を比較されたい)。

- (40) a. When did you buy what? (Kuno & Robinson 1972 : (3-4b))  
 b. What did you buy when? (Kuno & Robinson 1972 : (3-4b))  
 c. Where did he buy what? (Bošković 1997 : (27a))  
 d. What did he buy where? (Bošković 1997 : (27b))
- (41) a. When did you see Aida where? (Hornstein 1995 : p.126, (13c))  
 b. Where did you see Aida when? (Hornstein 1995 : p.126, (13d))
- (42) a. When did Mary read the Bible to whom? (Stroik 1996 : p.97, (50b))  
 b. On which weekend did Mary read the Bible to whom? (Stroik 1996 : p.97, (50b'))

それでは、(40a)と(40c)の適格性は、どのように説明されるであろうか。Stroik (1996)が属す話者グループと異なり、 $X^0$  範疇の右肢要素による左方C統御が許容される話者グループの存在を想定する。これにより、指示的な付加語 Wh 要素の Scope Position が目的語 Wh 要素の Scope Position をC統御することになる。同種の指示的な付加語 Wh 要素が共起する(41a-b)の適格性は、一方の付加語に他方の付加語が付加した構造を想定することにより説明されるであろう(付加語がお互いをC統御する)。 $X^0$  範疇の右肢要素以外の右肢要素に科される左方C統御の規制を満たす派生が想定可能となる(*when*が*where*に右方付加した派生、つまり(41b)の認容度が(41a)よりも高い(この認容度の相違は、Hornstein (1995 : p.228, fn.10)による))。

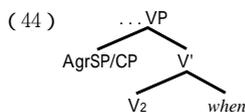
(42)において、 $V_2$ の姉妹位置に生成された付加語 Wh 要素(*when, where*)が $V_1P$ に右方付加した位置に生成される間接目的語 Wh 要素(*to whom*)をC統御することはない。本稿の仮説群は、(42a-b)の双方を非文と予測する(問題点)。この問題は、間接目的語 Wh 要素と指示的な付加語 Wh 要素が共起した場合に限定される。更なる調査が必要であることは言うまでもないが、仮に以下のように考える((41)を説明する論法と類似のプロセスを想定する)。間接目的語 Wh 要素と付加語要素(*when, where*)が共起される与格構文において、間接目的語と付加語要素の双方が構造(35)の $V_1P$ に右方付加した位置に基底生成されると考えてみよう。付加語と間接目的語の付加順序の相違により、右肢左方C統御の規制に抵触することのない(42a)と(42b)が想定可能となる。<sup>11)</sup>

本稿で採用されるC統御定義により、以下の相違も説明可能となる(付加語は、Matrix Vを修飾する)。(43a)は、問題なく排除される(目的語 Wh 要素(*what*)の Scope Position が付加語 Wh 要素(*where*)の Scope Position をC統御しない)。(43b)と(43c)の相違が興味深い。Bošković (1997)の論法によれば、ECM構造である(43b)では、Wh移動の適用に先立ち、目的語 Wh 要素

(*whom*) が Matrix Spec(AgrO) へ移動する。この Spec(AgrO) 位置が付加語 Wh 要素 (*where*) よりも上位であるため、(43b) が適格と予測される (Bošković (1997) では、付加語 (*when, where*) と目的語要素が同じ VP 内に生成され、後者の生成位置がより高位と前提される)。ECP 構文でない (43c) は、非文と予測されることになる。

- (43) a.\**Whati did John say [ CP that Peter bought ti ] where* (Bošković 1997 : (30))  
 b. *Whomi did John prove [ AgrSP ti to be guilty ] when?* (Bošković 1997 : (31))  
 c.\**Whoi did John prove [ CP ti was guilty ] when?* (Bošković 1997 : (32))

本稿の仮説群では、(43・b・c) の双方において、Matrix Spec(AgrO) が Scope Position として機能することはない。Matrix V (*prove*) が選択する範疇が問題となる。派生構造 (44) において、ECM 構文において選択される機能的範疇である AgrSP が重要な役割を果たすことになる (CP は語彙範疇と分類されている)。格付与のため、(43b) の目的語 Wh 要素 (*whom*) が Spec(AgrS) へ移動する。この Spec(AgrS) の位置が付加語 (*when*) の生成位置を C 統御する。(43c) において同じく Spec(AgrS) へ移動した主語要素 (*who*) は、付加語 (*when*) の生成位置を C 統御しない (Spec(AgrS) と付加語生成位置の間に語彙的範疇である CP が介在する)。つまり、(43b) が優位条件を満たす派生と指定される。



以下の純粋な優位性の効果 (Pure Superiority Effects) の用例もまた、本稿の優位条件によって説明可能となる。統語移動する Wh 要素の Scope Position が Wh-in-situ の Scope Position を C 統御する。

- (45) a. *Whoi did you expect [ ti to read what ]?* (Cheng and Demirdach 1990 : (5a))  
 b.?*Whatj did you expect [ who to read tj ]?* (Cheng and Demirdach 1990 : (5b))  
 c. *Who did you persuade to buy what?* (Hornstein 1995 : p.124, (5a))  
 d.\**What did you persuade who to buy?* (Hornstein 1995 : p.124, (5b))

しかしながら、以下の用例の中でこれまで想定されてきた本稿の仮説群に対して問題を提起するものがある。本稿の仮説群は、(46b) と (46d) さらに (46f)

を非文と予測する。(47b) と (39b) もまた、非文と予測される。

- (46) a.\*I don't remember what<sub>i</sub> [ who read t<sub>i</sub> ] Cinque 1995 : p.120, (39a))  
 b. ?I don't remember what<sub>i</sub> [ **which people** read t<sub>i</sub> ] Cinque 1995 : p.120, (39b))  
 c.\*Who<sub>i</sub> did you introduce who to t<sub>i</sub>? ( Cinque 1995 : p.120, (40a))  
 d. Who<sub>i</sub> did you introduce **which people** to t<sub>i</sub>? ( Cinque 1995 : p.120, (40b))  
 e. \*He has said who<sub>j</sub> who loved t<sub>j</sub> ( Uriagereka 1998 : p.366, (29b))  
 f. (? )He has said [ which student<sub>j</sub> ] **which professor** loved t<sub>j</sub> ( Uriagereka 1998 : p.366, (30b))
- (47) a.\*What<sub>i</sub> did you persuade wh<sub>( m )</sub> [ PRO<sub>j</sub> to read t<sub>i</sub> ]? ( Pesetsky 1987 : (20b))  
 b. Which book<sub>i</sub> did you persuade [ which man ] [ PRO<sub>j</sub> to read t<sub>i</sub> ] Pesetsky 1987 : (28b))
- (39) a. What did Mary read to Lou on which weekend? ( Stroik 1996 : p.97, (49a))  
 b. Who did Mary read the Bible to on which weekend? ( Stroik 1996 : p.97, (49b))

(46)にある問題用例はすべて、本来 Scope Position として機能することのない Spec( AgrO) がその Scope Position としての機能を取り戻すと前提することにより説明可能となる。つまり、優位条件の要請を満たす派生が想定できることになる。これは、典型的に [ *which* + NP ] で実現される D-Linked Wh 要素が生起する場合に限定される(これを、優位条件の緩和プロセス(1)と呼ぶ)。D-Linked Wh 要素が生起する(47b)において、不定法 CP 内の Spec( AgrO) が Scope Position として機能する。この Spec( AgrO) は、PRO が生成された位置を C 統御する。これにより、統語移動する Wh 要素が Wh-in-situ 要素を C 統御する派生が想定可能となる((47b) が適格と予測される)。

既に述べたように、与格構文における Spec( AgrO) は、Scope Position として機能する(通常与格構文では、Spec( AgrP) が Scope Position を構成しない)。この前提の下で、上の(39a)は適格と予測される。しかしながら、同じ論法は、(39b)を不適格と予測する。与格構文においても、D-Linked Wh 要素の生起によって、本来 Scope Position として機能しない Spec( AgrP) がその Scope Position としての機能を取り戻すと考えてみよう。統語移動する Wh 要素(*who*)に対応する Spec( AgrP) が指示的な付加語 Wh 要素(*on which weekend*)の Scope Position (当該要素の生成位置)を C 統御することになる。<sup>12)</sup>

本節の最後に、挿入的に用いられるチャンク(Chunk)(例えば, *you'll never guess, God knows, as you can imagine*)と Wh 要素が融合した表現の挙動について考える。既に検討したように、与格構文に属する(48)は、優位条件によって説明される。その一方で、チャンクと Wh 要素が融合した要素が生起する用例(49)では、優位条件の関与しないように思われる。(49)の用例は、[ *you can*

*imagine who* ] のようなチャンクと Wh 要素が融合した表現が D-Linked Wh 要素として機能すると前提することにより説明可能である。しかしながら、この論法は、(50) の用例と衝突することになる。

- (48) a. I'll find out [ how much money ] Bob gave ti to whom ( Guimaraes 2003 : ( 1a ) )  
 b. \*I'll find out whoj Bob gave [ how much money ] to tj ( Guimaraes 2003 : ( 1b ) )
- (49) a. I'll find out [ how much money ] Bob gave ti to [ **you can imagine who** ] ( Guimaraes 2003 : ( 4a ) )  
 b. I'll find out whoj Bob gave [ **you can imagine how much money** ] to tj ( Guimaraes 2003 : ( 4b ) )
- (50) a. Amy wonders [ how much money ] Bob gave ti to Tom ( Guimaraes 2003 : ( 5a ) )  
 b. \*Amy wonders [ God knows how much money ] Bob gave ti to Tom ( Guimaraes 2003 : ( 5b ) )

Guimaraes (2003) も指摘するように、この種の融合表現は、Wh 要素ではなく通常の数量詞として機能すると思われる。つまり、(49a) と (49b) の適格性は、本稿の用例 (24a) と (24b) の適格性に並行するものである (Wh 要素と数量詞との Scope 関係が異なるだけである)。

### 2.3 優位条件の緩和プロセス (2)

以下の用例 (51) から (53) が示すように、非指示的な付加語 Wh 要素 (*why*, *how*) が統語移動する多重疑問文が一律に非文と判断される話者グループの存在が確認される。この話者グループにおいて、統語移動した非指示的な付加語 Wh 要素 (*why*, *how*) が Wh-in-situ 要素をライセンスしないと考える (これは、Stroik (1996) による)。さらに、この種の付加語 Wh 要素は、主語要素と目的語要素の Scope Position を C 統御する位置に生成されると想定する。これにより、この (51) から (53) の用例すべてが説明可能となる。<sup>13)</sup>

- (51) a. \***Why** did you read Lou which book? ( Stroik 1996 : p.74, ( 2e ) )  
 b. \*Which book did you read Lou **why**? ( Stroik 1996 : p.74, ( 2e ) )  
 c. \*Do you know **why** who read the Bible? ( Stroik 1996 : p.99, ( 54 ) )  
 d. \*Do you know **why** Mary read what? ( Stroik 1996 : p.99, ( 55 ) )  
 e. \*Who left **why/how** ( Stroik 1996 : p.105, fn.5 )  
 f. \*what did Mary do **why/how**?
- (52) a. \***Why** does John believe who left? ( Stroik 1996 : p.89, ( 35c ) )  
 b. \***How** does John believe who left? ( Stroik 1996 : p.89, ( 35d ) )  
 c. \*I know **why** Mary believes John did what ( Stroik 1996 : p.89, ( 35e ) )  
 d. \*I know **how** Mary believes John did what ( Stroik 1996 : p.89, ( 35f ) )

- (53) a.\*What did Bill buy **why**? (Hornstein 1995 : p.147, (95a))  
 b.\***Why** did Bill buy what? (Hornstein 1995 : p.147, (95b))  
 c.\*I wonder **why** you bought what. (Hornstein 1995 : p.148, (100))

しかしながら、以下の用例(54c)と(55b)の適格性は問題を引き起こす。非指示的な付加語 Wh 要素 (*why, how*) は、単独で Wh-in-situ 要素をライセンスできないと想定されている。

- (54) a.\*Do you know **why** who read the Bible? (Stroik 1996 : p.99, (54)) (= (51c))  
 b.\*Do you know **why** Mary read what? (Stroik 1996 : p.99, (55)) (= (51d))  
 c. Do you know **why** who read what? (Stroik 1996 : p.99, (53b))
- (55) a.\*I wonder **why** which man danced (Hornstein 1995 : p.149, (104a))  
 b.?I wonder **why** which man danced with which woman (Hornstein 1995 : p.149, (104b))

どのようなプロセスによって、Wh-in-situ がライセンスされるのであろうか。本稿では、以下のようなプロセスを想定する(これを、優位条件の緩和プロセス(2)と呼ぶ)。例えば(54c)において、付加語 Wh 要素 (*why*) は主語 Wh 要素 (*who*) からなる Wh ペアが、同じ付加語 Wh 要素と目的語 Wh 要素 (*what*) からなる Wh ペアをライセンスすると考える。Wh ペアの Scope Position として、その構成要素である Wh-in-situ の Scope Position が指定される。この Wh ペアによるライセンスでは、より左方に生起する Wh-in-situ から構成される Wh ペアの Scope Position がより右方に生起する Wh-in-situ から構成される Wh ペアの Scope Position を C 統御しなければならない。これにより、(54c)と(55b)の適格性が説明可能となる。この Wh ペアの形成は、統語移動する要素が非指示的な付加語 Wh 要素に限定されるものでなく、統語移動する Wh 要素全般に適用されるものである。同様に、Reinhart (1998) の用例である(10b)の非文性も説明される(当該用例を(56a)として再掲する)。

- (56) a.\*Who spoke when how? (Reinhart 1998 : (29b))  
 b.\*Who arrived why? (Reinhart 1998 : (6))  
 c.??Who spoke how (Reinhart 1998 : (29a))

より左方に生起する Wh-in-situ 要素 (*when*) の Scope Position がより右方に生起する Wh-in-situ 要素 (*how*) の Scope Position を C 統御することはない(構造(35)を参照されたい)。(56b-c)の用例が示すように、主語 Wh 要素 (*who*) の Scope Position が付加語 Wh 要素の Scope Position を C 統御することはない。同様

の論法により、以下の用例はすべて適格と予測される（与格構文において、Spec (AgrO) が Scope Position として機能すると前提されている点に留意されたい）。

- (57) a. Who gave what to whom? (Pesetsky 2000 : p.49, (88a))
- b. What did who give to whom? (Pesetsky 2000 : p.49, (88b))
- c.?Who did who give what to? (Pesetsky 2000 : p.49, (88c))
- d. Who persuades who to buy what? (Pesetsky 2000 : p.49, (89a))
- e.?Who did who persuade to buy what? (Pesetsky 2000 : p.49, (89b))
- f. What did who persuade whom to buy? (Pesetsky 2000 : p.49, (89c))

同じ論法は、以下の (58a-b) を不適格と予測する（問題点）、(59a-d) が示すように、Kuno and Takami (1993) が挙げる用例は、(51) から (53) の用例と同じ話者グループに属す。

- (58) a. Who bought what **why**? (Kuno and Takami 1993 : p.197, fn.45)
- b. Who danced which waltz **how**? (Kuno and Takami 1993 : p.197, fn.45)
- (59) a.\*Who left why/how? (Kuno and Takami 1993 : p.124, (72a))
- b.\*What did you do why/how? (Kuno and Takami 1993 : p.124, (72b))
- c.??Why did you buy what? (Kuno and Takami 1993 : p.124, (116a))
- d.??How did you do what? (Kuno and Takami 1993 : p.124, (116b))

この問題は、(58)における付加語 Wh 要素 (*why, how*) が付加語 Wh 要素 (*for what reasons, in what manner*) の解釈で用いられると想定することにより打開される。(60b)の用例は、主語 Wh 要素 (*who*) の Scope Position が付加語 Wh 要素 (*for what reasons*) の Scope Position を C 統御することを物語る。具体的に、付加語 Wh 要素 (*for what reasons, in what manner*) が指示的な付加語 Wh 要素 (*when, where*) と同じ位置に生成されると想定する (Kuno and Takami (1993 : p.120) では、付加語 Wh 要素 (*for what reasons*) が VP-Adjunct と想定される)。付加語 Wh 要素 (*why, how*) が付加語 Wh 要素 (*for what reasons, in what manner*) の解釈では、目的語 Wh 要素 (*what, which waltz*) の Scope Position (生成位置) が当該付加語の Scope Position (生成位置) を C 統御する。つまり、(58a-b) が適格と予測されることになる。

- (60) a.\*Tell me who came why (Kuno and Takami 1993 : p.120, (130a))
- b. Tell me who came for what reasons (Kuno and Takami 1993 : p.120, (130b))

この優位条件の緩和プロセス(2)の適用は、ある局所領域内に限定されると

考えられる。Aoun and Li (2003) による用例から判断する限りにおいて、最も深く埋め込まれた位置に生成される Wh 要素を含む最小の CP がその局所領域と指定されるようである（但し、最小の不定法 CP (AgrSP) はカウントされない）。つまり、この局所領域内部に統語移動した Wh 要素（あるいはその中間痕跡）と複数の Wh-in-situ が生起する必要がある（波線下線が、その局所領域を表す）。例えば (61a) において、最も深く埋め込まれた C (*that*) によって導入された CP がその局所領域を形成する。<sup>14)</sup>

- (61) a.\*I'd like to know where who said [ that what was hidden ] ( Kayne 1983 : ( 41 ) )  
 b.\*To whom did who say [ that John would buy what ]? ( Aoun & Li 2003 : p.225, ( 9a ) )  
 c.\*Who did who introduce to guests [ that came from where ]? ( Aoun & Li 2003 : p.225, ( 9b ) )  
 d.\*Who did who ask [ to tell Mary to dance with whom ]? ( Aoun & Li 2003 : p.225, ( 9c ) )  
 e.\*[ what book ] did you tell what man [ to persuade who [ to give ti to me ] ]  
 ( Pesetsky 1982 : p.618, ( 70 ) )  
 f.\*whoi ti said to whom [ that [ for Bill to marry who ] would a surprise to Mary ]  
 ( Pesetsky 1982 : p.618, ( 71c ) )

### 3 . スペイン語における優位条件とペア列挙の読み

スペイン語においても優位条件が適用される。これは、(62c-d) の非文性によって例証される。(62a-b) の適格性は、Spec(AgrO) が Scope Position として機能すると前提することにより説明される（一般的に、スペイン語の多重疑問文における Spec(AgrO) が Scope Position として機能すると想定する）。

- (62) a.¿Quién compró qué? ( Uribe-Etxebarria 1995 : ( 2a ) )  
 who bought what  
 ' Who bought what? '  
 b.¿Qué compró quién? ( Uribe-Etxebarria 1995 : ( 2b ) )  
 what bought who  
 ' What did who buy? '  
 c.\*¿Qué dijo quién que Juan compró ti? ( Bošković 1997 : ( 27a ) )  
 what said who that Juan bought  
 ' What did who say that Juan bought? '  
 d.\*¿Qué le ha pedido a quién que compre ti? ( Hornstein 1995 : p.142, ( 73a ) )  
 what him asked whom that buy-subj  
 ' What did she ask whom to buy? '

Wh 要素と英語の [ *every* + NP ] に対応する普遍数量詞表現 ( *cada* + NP ) の共起によって発動するペア列挙の読みにおいても、Spec(AgrO) が Scope Position として機能すると前提してみよう。この前提は、以下の用例 (63a-b) において

ペア列挙の読みが許容されると予測する。しかしながら、(63b)におけるペア列挙の読みは排除される(問題点)<sup>15)</sup>

(63) a.¿A quién examinó cada doctor? [ <sup>ok</sup>Pair-list ]( Jaeggli 1988 : ( 7a ))

whom examined every doctor

‘ Who did every doctor examine? ’

b.¿Quién examinó a cada paciente? [ \*Pair-list ]( Jaeggli 1988 : ( 7b ))

who examined every patient

‘ Who examined every patient? ’

英語と同様に、間接目的語要素がその Spec 位置に主語要素が生成される VP に右方付加した位置に基底生成されると考える(この場合、構造(22)の AgrP の投射は関与しない)。スペイン語において、右肢左方 C 統御が許容されると想定する。この前提の下では、以下の(64a-b)が共にペア列挙の読みを許容すると予測される。(65)と(66)における付加語 PPもまた、間接目的語と同じ位置に生成されると想定した場合、(65a-b)と(66a-b)においてペア列挙の読みが許容されると予測される(非対格表現である(66)において、主語要素は直接目的語の位置に生成されると考える)。しかしながら、(65a)と(66a)では、ペア列挙の読みが排除される(問題点)。

(64) a.¿A quién entregó María cada regalo? [ <sup>ok</sup>Pair-list ]( Jaeggli 1991 : ( 17a ))

to whom gave María every gift

‘ To whom did María give every gift? ’

b.¿Qué nota le otorgó el profesor a cada estuinate? [ <sup>ok</sup>Pair-list ]( Jaeggli 1991 : ( 17b ))

what grade to him gave the professor to every student

‘ What grade did the professor give every student? ’

(65) a.¿Quién habló en cada conferencia de este año? [ \*Pair-list ]( Jaeggli 1991 : ( 13a ))

who spoke in every conference of this year

‘ Who spoke in every conference this year? ’

b.¿En qué conferencia habló cada profesor? [ <sup>ok</sup>Pair-list ]( Jaeggli 1991 : ( 14a ))

in which conference spoke every professor

‘ In which conference did every professor speak? ’

(66) a.¿Quién llegó de cada ciudad que conoce María? [ \*Pair-list ]( Jaeggli 1991 : ( 15a ))

who arrived from every city that knows María

‘ Who arrived from every city that Maria knows? ’

b.¿De qué ciudad que conoce María llegó cada turista? [ <sup>ok</sup>Pair-list ]( Jaeggli 1991 : ( 16a ))

from which city that knows María arrived every tourist

‘ From which city that Maria knows did every tourist arrive? ’

ここで、問題を引き起こす用例のすべてにおいて、主語 Wh 要素 (*quién*) が生起する点に留意されたい。これに類似する問題が、Beghelli (1997) の用例においても観察される。本稿の (25) で確認したように、Beghelli (1997) が属す話者グループでは、与格構文の Spec(AgrP) が Scope Position として機能する (Spec(AgrO) が Scope Position を構成することはない)。(67a-b)において、Spec(AgrP) が主語 Wh 要素 (*who*) と目的語 Wh 要素 (*what*) の Scope Position (それぞれの生成位置) を C 統御する。つまり、本稿の仮説群は、(67a-b) の双方がペア列挙の読みを許容すると予測する (問題点)。

- (67) a. **Who** showed this book [ to every man ]? [\*Pair-list] ( Beghelli 1997 : ( 67e ) )  
 b. What did you show [ to every man ]? [<sup>?</sup>Pair-list] ( Beghelli 1997 : ( 3a ) ) (= ( 25a ) )

上で確認された問題点は、すべて同じプロセスを想定することにより説明可能となる。何らかの要因によりその Scope Position として機能を失う場合を除き、主語要素の Scope Position として、Spec(AgrS) が指定される話者グループの存在を前提する。(67a)において、Spec(AgrP) は Spec(AgrS) を C 統御することはない。問題となっているスペイン語用例においても、普遍数量詞の Scope Position が Spec(AgrS) を C 統御することはない。

英語の心理動詞の用例の箇所を確認したように、このタイプの派生における Spec(AgrS) が Scope Position として機能することはない (このことは、本稿の考察対象であるスペイン語の話者グループにおいても同様である) 。つまり、スペイン語の心理動詞用例に対しても、対応する英語用例と同様の挙動が期待される。これは、以下の (68) により例証される (便宜上、(27) を再掲する)。

- (68) a. ¿A quién le molesta cada canción que tocan por la radio? [\*Pair-list] ( Jaeggli 1988 : ( 18b ) )  
 to whom him bothers every songs that they play by the radio  
 ‘ Who does every song that they play on the radio bother? ’  
 b. ¿Qué canción de los Beatles le molesta a cada adulto que conoces? [<sup>ok</sup>Pair-list] ( Jaeggli 1988 : ( 17b ) )  
 which song of the Beatles him bothers to every adult that you know  
 ‘ Which song by the Beatles bothers every adult that you know? ’
- (27) a. What worries everyone? [<sup>ok</sup>Pair-list] ( Kim & Larson 1989 : ( 6a ) )  
 b. Who does everything worry? [\*Pair-list] ( Kim & Larson 1989 : ( 6b ) )

#### 4. 結 び

D-Linked Wh 要素の生起によって発動する優位条件の緩和プロセス (1) は、喚情要素 (Affective Element) が生起する (69) から (74) の用例をすべて適格

と予測する（喚情要素は太字で表示される）。(69)と(70)において、本来 Scope Position として機能しない Spec( AgrO ) と Spec( AgrP ) のそれぞれが Scope Position としての機能を取り戻す。与格構文である(71)から(73)では、Spec( AgrP ) が Scope Position として機能するようになる（与格構文では、本来的に Spec( AgrO ) が Scope Position として機能する）。(74)においても、与格構文と同様の状況が想定される。つまり、不適格と判断される(69d)と(70)から(74)の(b)の用例が問題となる。

- (69) a. Which person did **not** read which book? ( Pesetsky 2000 : p.60, ( 98a ))  
 b. Which person **didn't** read which book? ( Pesetsky 2000 : p.60, ( 98b ))  
 c. Which book did which person **not** read? ( Pesetsky 2000 : p.60, ( 98c ))  
 d.\*Which book **didn't** which person read? ( Pesetsky 2000 : p.60, ( 98d ))
- (70) a. [ Which topic ] did he claim which student would **never** talk about ti? ( Pesetsky 2000 : p.61, ( 101a ))  
 b.?? [ Which topic ] did he **never** claim which student would talk about ti? ( Pesetsky 2000 : p.61, ( 101b ))
- (71) a. [ Which book ] did **no one** give ti to which student? ( Pesetsky 2000 : p.61, ( 100a ))  
 b.?? [ Which student ] did **no one** give which book to tj? ( Pesetsky 2000 : p.61, ( 100b ))
- (72) a. [ Which picture ] did very few children want to show ti to which teacher?  
 ( Pesetsky 2000 : p.61, ( 102a ))  
 b.?? [ Which teacher ] did very few children want to show which picture to tj?  
 ( Pesetsky 2000 : p.61, ( 102b ))
- (73) a. [ Which girl ] did **only Mary** introduce ti to which boy? ( Pesetsky 2000 : p.61, ( 103a ))  
 b.?? [ Which boy ] did **only Mary** introduce which girl to tj? ( Pesetsky 2000 : p.61, ( 103b ))
- (74) a. [ Which issue ] should I **not** discuss ti with which diplomat? ( Pesetsky 2000 : p.61, ( 99a ))  
 b.?? [ Which diplomat ] should I **not** discuss which issue with tj? ( Pesetsky 2000 : p.61, ( 99b ))

上の問題用例は、どのようなプロセスによって排除されるのであろうか。ある一定の構造上の条件下で、緩和プロセスによって Scope Position として追加された Spec( AgrO ) あるいは Spec( AgrP ) が Scope Position として機能を失うと考えてみよう（本来的に Spec( AgrO ) が Scope Position として機能する与格構文では、この Spec( AgrO ) に関する機能喪失は発動しない）。この機能喪失は、Spec( C ) 位置へ統語移動する Wh の痕跡と Wh-in-situ の双方が喚情要素に C 統御される場合に限り発動すると考えられる。つまり、否定要素 ( not ) が C 位置へ移動した(69d)において、Spec( AgrO ) が Scope Position として機能しなくなる。(70b)においては、Spec( AgrP ) が Scope Position としての機能を失う。(71)か

ら (74) においても, Spec( AgrP) が Scope Position としての機能を失う (Spec( AgrO) は Scope Position として機能する)。これにより, 上の問題用例のすべてが優位条件によって排除されることになる (Scope Position としての Spec( AgrP) の機能が関与しない (71) から (74) の (a) の用例はすべて適格と予測される)。

以下の (75a) と (75c) の適格性は, 本稿の用例 (30a) と (31a) の非文性と衝突する (便宜上, (30) と (31) を再掲する)。(75d) は, D-Linked Wh 要素による優位条件の緩和プロセス (1) によって, その適格性が説明可能である (Spec( AgrP) が Scope Position として機能する)。

- (75) a. ?I know who( m) I should give what to ( Kayne 1983 : fn.13 )  
 b. \*I know who( m) what should be given to ( Kayne 1983 : fn.13 )  
 c. Who did you give what to? ( Kuno & Takami 1993 : p.148, ( 71a ) )  
 d. Which box did you put which book in? ( Kuno & Takami 1993: p.148, ( 71b ) )
- (30) a. \*Who did Mary read what to? ( Stroik 1996: p.95, ( 45b ) )  
 b. What did Mary read to whom ( Stroik 1996: p.95, ( 45a ) )
- (31) a. \*Who( m) did you send what/which check to? ( Hornstein 1995 : p.127 )  
 b. What/which check did you send to who? ( Hornstein 1995 : p.127 )

ここで, ある特定の話者グループにおいて, 与格構文から構成される多重疑問における Spec( AgrP) が Scope Position として機能すると考えてみよう。その場合, (75a-d) のすべてが適格と予測される。しかしながら, 受動文である (75b) は非文と判断される (問題点)。この問題は, スペイン語と Beghelli (1997) が挙げる英語用例 (67) における Wh 要素と普遍数量詞の共起によるペア列挙の読みの考察で想定した Scope Position の固定によって説明されると思われる。つまり, Spec( AgrP) が Scope Position として機能するこの話者グループにおける与格構文では, 主語要素の Scope Position がその生成位置ではなく, Spec( AgrS) に固定されると前提する。よって, (75b) において, Spec( C) 位置へ統語移動する Wh 要素 ( who ( m ) ) の Scope Position ( Spec( AgrP) ) が主語である Wh-in-situ 要素 ( what ) の Scope Position ( Spec( AgrS) ) を C 統御することはない。

本稿では, [ V DP1 DP2 ] の構造をもつ二重目的語構文に関する検討は割愛される。本稿の註 (7) で指摘したように, Wh 要素と普遍数量詞の共起によって発動するペア列挙の読みにおいて, DP1 の Scope Position が DP2 の Scope Position を C 統御する。以下の用例 (76) からも判明するように, この状況は多重疑問

文中でも同様である。

- (76) a. Who did you give what/which check? (Hornstein 1995 : p.127)(Stroik 1996 : p.74, (2a))  
 b.\*What/which check did you give who? (Hornstein 1995 : p.127)(Stroik 1996 : p.74, (2b))

二重目的語構文がどのような VP Shell 構造をもっているとしても、DP1 が DP2 を C 統御しなければならない(少なくとも、主語要素の生成位置が、DP1 と DP2 の生成位置を C 統御する)。Spec(AgrO) における照合操作においても、DP1 が DP2 を C 統御すると考える(後者の前提は、Hornstein (1995 : pp.178 - 179) による)。DP1 と DP2 は常にペアを形成しているため、DP1 の Scope Position は常に同一である。DP1 の Scope Position が Spec(AgrO) となり、DP2 の Scope Position がその生成位置と指定されることはないと考えられる。このような前提の下でも、以下の用例(77b)は適格と予測される((77a)の適格性が物語るように、Wh 要素 (*how many* + NP) が生起する与格構文での Spec(Agrs) は Scope Position として機能する)。さらに、(78c-d) の非文性も問題を引き起こす(本稿の仮説群は、当該用例を適格と予測する)。(78a) と (78b) の相違は、適切に説明可能である。(78a) は、Wh 要素 (*how many* + NP) が D-Linked Wh 要素の挙動をとらないことを示す (Spec(AgrP) が Scope Position として機能しないため、Spec(C) 位置へ統語移動する Wh 要素 (*who* (m)) の Scope Position (生成位置) が Wh-in-situ の Scope Position (VP 内の生成位置) を C 統御することはない)。D-Linked Wh 要素が Wh-in-situ 要素である (78b) では、Scope Position として機能する Spec(AgrP) が Wh-in-situ 要素の Scope Position (VP 内の生成位置) を C 統御する。

- (77) a. Who gave a book to whom? (Müller 1995 : p.322, (117a))  
 b.\*Who gave whom a book? (Müller 1995 : p.322, (117b))
- (78) a.\*I need to know who(m) **how many people** voted for? (Hornstein & Weinberg 1987 : (21))  
 b. I need to know who(m) what type of people/which people voted for  
 (Hornstein & Weinberg 1987 : (22))  
 c.\*I need to know who/which candidate talked to **how many people**  
 (Hornstein & Weinberg 1987 : (26))  
 d.\*I need to know who/which candidate was introduced to **how many people**  
 (Hornstein & Weinberg 1987 : (26))  
 e. I need to know **how many people** voted for whom/which people  
 f. I need to know **how many people** introduced whom/which people to Mary

それでは、(77a) と (78c-d) が引き起こす問題の打開策として、どのような

プロセスが想定されるであろうか。心理動詞が生起する派生の特殊性を想起されたい。Wh 要素と普遍数量詞の共起によるペア列挙の読みにおいて、Spec(AgrS) が Scope Position として機能しない。最初に、(77b) について考える。既に想定したように、二重目的語構文における DP1 と DP2 はペアを形成し、前者が後者を C 統御する (VP Shell 内部と Spec(AgrO) の双方において) と格構文である (77a) は、Spec(AgrS) が Scope Position として機能することを示す。ここで、二重目的語構文における Spec(AgrS) が Scope Position としての機能を失うと考えてみよう (主語要素の生成位置が Scope Position として機能することになる)。さらに、二重目的語構文における DP1 と DP2 の Scope Position として、Spec(AgrO) 内部に限定されると考える (DP1 と DP2 生成位置が Scope Position となることはない)。結果として、(78b) において統語移動する主語 Wh 要素 (*who*) の Scope Position は目的語 Wh-in-situ 要素 (*whom*) の Scope Position を C 統御することはない。<sup>16)</sup>

(78c-d) においても、Spec(AgrS) が Scope Position として機能しないと考えてみよう。(78e-f) の適格性からして、Wh 要素 (*how many* + NP) が生起する場合、当該 Wh 要素が統語移動する Spec(AgrS) のみが Scope Position として機能すると前提する (主語要素としての Wh 要素 (*how many* + NP) が移動する Spec(AgrS) と、あるいは更に当該 Spec 位置を経由して Spec(C) 位置へ統語移動する派生においてのみ、この Spec(AgrS) が Scope Position として機能することになる。その他の派生では、主語要素の Scope Position としてその生成位置が指定される)。つまり、(78c-d) において、Spec(C) 位置へ統語移動する Wh 要素 (*who*, *which candidate*) の Scope Position として Spec(AgrS) が指定されることはない。当該 Wh 要素の生成位置 (構造図式 (35) の Subject DP と Object DP) が Scope Position として機能する。この統語移動する Wh 要素の Scope Position が Wh 要素 (*how many* + NP) の Scope Position を C 統御することはない。<sup>17)</sup>

これまで提示された予測体系を確認することにより、本稿で設定された仮説群の修正・破棄が必要であることは言うまでもない。<sup>18)</sup>

## 註

- 1) Kayne (1983 : fn.13) が指摘するように、ある特定の話者グループにおいて、D-Linked Wh 要素が生じた派生においても優位条件が遵守される。このグループにおいて、(1b) 同様、(2b) は不適格と判断される。

- (i) a.\*?I want to know what book which students took home with him. (Kayne 1983 : fn.13)  
b.\*?The police are trying to figure out which taxi which robber got into. (ibid.)

一方、スペイン語とドイツ語では、優位条件が適用されないように見える。

- (ii) a. Juan sabe quién dijo qué. ( Jaeggli 1982 )  
 John knows who said what  
 ‘ John knows who said what. ’  
 b. Juan sabe qué dijo quién ( ibid. )  
 ‘ John knows what who said ’
- (iii) a. Ich weiß nicht, wer was gesehen hat. ( Pesetsky 2000 : p.17 )  
 I know not who what seen has  
 ‘ I don't know who has seen what. ’  
 b. Ich weiß nicht, was wer gesehen hat.  
 ‘ I don't know what who has seen ’

- 2 ) ブルガリア語に対する発音規則は、以下のように規定される ( Pesetsky 2000 : p.8 )

Pronunciation rule ( for Bulgarian ) :

All wh-phrase movement to C is *overt*, in that wh is pronounced in its new position and unpronounced in its trace positions.

ブルガリア語において、ゼロ範疇として素性 [ + wh ] の移動がそれに対応する最大投射である Wh 要素を随伴すると想定される、英語では、ゼロ範疇として素性 [ + wh ] のみが C へ移動する ( C に Copy される ) と考えている点に留意されたい。

優位効果 ( Superiority Effect ) が観察されないスペイン語 ( ドイツ語, Serbo-Croatian ) の用例は、多重疑問文を導入する C が C<sub>m-spec</sub> でなく、単一の最大投射 Wh 要素がその Spec 位置へ移動する C<sub>1-spec</sub> と想定することにより説明される。

- 3 ) Pesetsky ( 2000 ) 自身もまた、D-Linked Wh 要素に対する規制 ( 6 ) の不適用を問題視している ( 最終的な打開策が提示されていない )。この点に関しては、Pesetsky ( 2000 : pp.73-74 ) と註 ( 89 ) を参照されたい。
- 4 ) Principle of Minimal Compliance は、本来 Richards ( 1997, 1998 ) で提唱されたものである。Pesetsky ( 2000 : p.25 ) では、以下のように簡略な解釈が採用されている。

- (i) Principle of Compliance :

Once an instance of movement to  $\bar{A}$  has obeyed a constraint on the distance between source and target, other instances of movements to  $\bar{A}$  need not obey this constraint.

Aoun and Li ( 1993, 2003 ) による優位条件の説明法についての検討は、稿を改める。

- 5 ) C 統御定義として、Hornstein ( 1995 : p.176 ) の定義を採用する。機能的範疇 ( Functional Category ) として Agr と D が指定される ( その他の範疇が語彙的範疇 ( Lexical Category ) と同定される )。

- (i) Definition of c-command:

A c-commands B iff every lexical projection that dominates A dominates B.

- 6 ) Spec ( AgrO ) が Scope Position となるのは、直接目的語と間接目的語要素が共起する派生に限定される ( 同じことは、多重疑問文の与格構文にも妥当する )。 ( 25 ) と ( 26 ) の判断が下される話者グループ対して、以下の予測が可能となる ( 未検証 )。

- (i) a. Who did you give everything to? [ \*Pair-list ]  
 b. Which man did you give everything to? [ \*Pair-list ]

Stroik (1996) の用例 (24) との関連で、以下の優位条件に関する (ii) の用例は興味深い。以下に述べるように、AgrS 以外では AgrO の Spec 位置が Scope Position として機能すると考えなければならない (Spec AgrP は Scope Position を構成しない)。このことは、(23) の判断を下す話者グループでも同様である。

- (ii) a. What did Mary read to whom? (Stroik 1996 : p.95, (45a))  
 b.\*Who did Mary read what to? (Stroik 1996 : p.95, (45b))

本稿の匿名レフリーは、Spec (AgrO) が Scope Position として機能しないことが理論にどのような原理から導出されるかが不明であると指摘する。普遍数量詞と存在数量詞が共起する (20) などの用例では、Spec (AgrO) が Scope Position として機能する。その一方で、本稿では、Wh 要素と普遍数量詞が共起する (18) と (19) などの用例では、Spec (AgrO) が Scope Position として機能しないと前提される。この異同は、稿を改めて検討する必要がある。さらに同じ匿名レフリーが指摘するように、D-Linked Wh 要素が生起する (26a-b) において想定される Spec (AgrP) の Scope Position としての機能停止について検討する必要がある (D-Linked Wh 要素それ自体の生起に注目して、この場合直接目的語である D-Linked Wh 要素の Scope Position として Spec (AgrO) が指定されると考える論法も可能であろう)。

- 7) [ V DP<sub>1</sub> DP<sub>2</sub> ] の構造をもつ二重目的語構文 (Double Object Construction) に関する論者は、稿を改める。数量詞同士の Scope 関係については、話者グループごとの異同が確認される (i)。ペア列挙の読みに関しては、一様な判断が観察される (DP<sub>1</sub> の Scope Position が DP<sub>2</sub> の Scope Position を C 統御する) (ii-iii)。

- (i) a. I read everyone something (ambiguous) (Stroik 1996 : p.45, (32b))  
 everyone > something    everyone < something  
 b. John threw someone every football (unambiguous) (Hornstein 1995 : p.177, (93b))  
 someone > every football    \*someone < every football

- (ii) a. What did Mary read everyone? [ <sup>ok</sup>Pair-list ] (Stroik 1996 : p.45, (33a))  
 what > everyone    what < everyone  
 b. Who did Mary read everything? [ \*Pair-list ] (Stroik 1996 : p.45, (33b))  
 who > everything    \*who < everything

- (iii) a. What did you assign everyone? [ <sup>ok</sup>Pair-list ] (Hornstein 1995 : p.115, (60b))  
 b. Who did you assign everything? [ \*Pair-list ] (Hornstein 1995 : p.115, (61b))

- 8) 本稿の第4節においても、Spec (AgrS) が Scope Position として機能しないと思われる事例が提示される。

Chierchia (1993) の判断による受動文用例 (i) の相違が興味深い。

- (i) a. By whom was every speaker introduced? [ <sup>ok</sup>Pair-list ] (Chierchia 1993 : (98a))  
 b. Who was introduced by every faculty member? [ \*Pair-list ] (Chierchia 1993 : (99a))

(ia) の判断からして、V の姉妹位置に生成されるとされる DP (*every speaker*) が移動す

る Spec( AgrS ) が Scope Position として機能することになる。更に, Spec( AgrS ) が付加語の PP ( *by whom* ) が基底生成される位置を C 統御することになる ( この付加語が VP に右方付加した位置に生成されると想定する ) ( ib ) の [ \*Pair-list ] が問題となる。付加語 PP ( *by every faculty member* ) 中の普遍数量詞の Scope Position が Wh 要素の Scope Position を C 統御不可能であるはずである。この効果は, 受動における動作主を導入する PP ( *by + DP* ) 中の DP の格素性を照合する Spec( AgrP ) が Scope Position として機能しないと前提することにより得られる。あるいは, 本稿の第 4 節で指摘されるように, この Spec( AgrP ) が Scope Position として機能すると考えた場合の立論も可能である。この論法では, 受動における主語要素の Scope Position がその生成位置ではなく, Spec( AgrS ) に固定されると想定しなければならない。

- 9 ) ペア列挙の読みの用例である ( 24a ) では, 数量詞 ( *everyone* ) の Scope Position として Spec( AgrP ) が指定される。この Spec( AgrP ) 位置が右肢でないため, 右肢左方 C 統御の規制に抵触することはない。後述するように, X<sup>0</sup> 範疇の右肢要素による左方 C 統御が排除される話者グループと許容される話者グループの存在が確認される。
- 10 ) 多重疑問文の与格構文における Spec( AgrP ) が Scope Position として機能しないと前提されている。この前提は, ( 39b ) を不適格と予測する ( 問題点 )。この問題は, 後述する D-Linked Wh 要素による優位条件の緩和プロセスによって打開される。
- 11 ) この論法が妥当する場合, 統語移動する Wh 要素が逆転した以下の ( ia-b ) の双方も適格と予測される ( 未検証 )

- ( i ) a. To whom did Mary read the Bible when?  
b. to whom did Mary read the Bible on which weekend?

- 12 ) この論法が妥当する場合, 以下の ( i ) が非文と予測されることになる ( 未検証 )。

- ( i ) \*Who did Mary read the Bible to when?

本稿の論法により, 以下の ( ii ) の用例もまた説明可能となる。これらの用例において, Wh-in-situ 要素 ( [ *books about what* ], [ *stories about whom* ], [ *the children sitting on whose lap* ], [ *whose mother* ], [ *what type of people* ] ) が D-Linked Wh 要素と想定される。本稿では, D-Linked Wh 要素という用語は Pesetsky ( 1987 ) のそれよりも広い意味で用いられ, 話者と聞き手の双方においてその外延が談話情報, あるいは強勢等の音声情報によって画定可能となる Wh 要素を表す。

- ( ii ) a. Who do **books about what** annoy most? ( Stroik 1996 : p.80, ( 16a ) )  
b. Who were **stories about whom** being told to? ( Stroik 1996: p.80, ( 16b ) )  
c. What did **the children sitting on whose lap** want to read? ( Stroik 1996: p.80, ( 16c ) )  
d. What did **whose mother** buy? ( Hornstein and Weinberg 1987 : ( 19b ) )  
e. I need to know who( m ) **what type of people** voted for ( Hornstein and Weinberg 1987 : ( 22 ) )

例えば Scope Position として機能する Spec( AgrO ) と言ったような D-Linked Wh 要素としての機能プロセスは, 統語移動する Wh 要素を含む最小の完全機能複合 ( Complete Functional Complex ( CP, あるいは AgrSP ) 内で適用される。よって, 統語移動する直接目的語 Wh 要素がより下位の CP ( AgrSP ) に生成される以下の用例 ( iii ) はすべて優位条件によって排除されることになる。

- ( iii ) ( Aoun and Li 2003 : p.267, fn.5, ( iva ); ( ivb ); ( ivc ) )

- a.\*Whati did [ books about whom ] cause [ many readers to get annoyed about ti ]?
- b.\*Whoi would [ friends of whom ] say to Mary [ that stories were being told to ti ]?
- c.\*Whati did [ the children sitting on whose lap ] think that you would read ti ]?

以下の (ivb) の適格性もまた興味深い。PRO に付与された指標と同一の指標をもつ Wh 要素が D-Linked Wh 要素と解釈されると前提してみよう。この前提の下で、Scope Position として機能する Spec( AgrO) が Wh-in-situ 要素 (*who*) の Scope Position を C 統御することになる。この事象は、(Matrix) V の目的語 Wh 要素が統語移動する派生に限定され、本文の (47b) で観察されるような Wh-in-situ 要素が不定法節内の PRO によって代替されることはない。この PRO による代替は、D-Linked Wh 要素として認定される要素の生起がその誘因となるものである。(ivb) では、不定法節内の PRO の生起が D-linked Wh 要素の認定を惹起するものである。

- (iv) a.\*Who did who persuade that Bill should leave ( Hornstein 1995 : p.144, ( 84a) )
- b. Whoi did who persuade ti [ PRO: to leave ]( Hornstein 1995 : p.144, ( 84b) )
- c.\*What did who reveal about Paul? ( Hornstein 1995 : p.144, ( 84c) )
- d. What did whoi reveal about hisi mother? ( Hornstein 1995 : p.144, ( 84d) )

(ivd) の適格性は、問題を惹起する。代名詞 (*his*) と同一指標の関係にあるのは、主語 Wh 要素 (*who*) である (目的語 Wh 要素 (*what*) でない)。つまり、(ivb) の適格性を説明する論法により、(ivd) が不適格と予測される (問題点)。この問題は、特定の環境下において、長距離移動する Wh 要素が D-Linked Wh 要素として振る舞うと前提することにより打開されるであろう (詳細な論考は、稿を改める)。

二つの Wh 要素の中で一方のみが D-Linked Wh 要素として振る舞うと思われる派生の判断には異同が見られる。通常、D-Linked Wh 要素が Wh-in-situ として生起する派生は、基本的に適格と判断される (v)。しかしながら、D-Linked Wh 要素が Spec(C) 位置へ統語移動する派生の判断には揺れが観察される。基本的に適格と判断される話者グループと、非文と判断とされるグループの存在も確認される (vi)。

- (v) a. I wonder which book which person read ( Hornstein 1995 : p.234, fn.51, ( ia) )
- b.?I wonder what which person saw? ( Hornstein 1995 : p.234, fn.51, ( ib) )
- c.?What did which student read? ( Comorovski 1996 : p.85, ( 9b) )
- d.\*I wonder what who said ( É. Kiss 1993 : ( 61a) )
- e. I wonder what which person said ( É. Kiss 1993 : ( 61b) )

- (vi) a.\*What did who bring? ( Aoun and Li 2003 : p.235, fn.23, ( ii) )
- b.\*Which present did who bring? ( Aoun and Li 2003 : p.235, fn.23, ( iii) )
- c.?Which book did how many people buy? ( Comorovski 1996 : p.85, ( 9a) )

- 13) 以下の用例が示すように、統語移動した非指示的な付加語 Wh 要素が Wh-in-situ をライセンス可能な話者グループの存在も確認される。この話者グループにおいて、非指示的な付加語 Wh 要素は Spec( AgrS) と目的語 Wh 要素の生成位置の間にある最大投射に付加した位置に生成されると考えられる。これにより、(i) と (ii) の用例のすべてが説明可されることになる。

- (i) a. Why did John do what? ( Mahajan 1990 : p.178, ( 97b) )
- b. How did John fix what? ( Cheng and Demirdach 1990 : ( 29a) )

英語における優位条件の緩和について

- c. Tell me how John fixed which car ( Huang 1995 : ( 120a ))
- d.\*What did John do why? ( Mahajan 1990 : p.178, ( 97a ))
- e.??What did John fix how? ( Cheng and Demirdach 1990 : ( 29b ))
- f.\*Tell me which car John fixed how ( Huang 1995 : ( 120b ))

- ( ii ) a. Who left why? ( Mahajan 1990 : p.177, ( 96 ))
- b.\*How did who fix the car? ( Cheng and Demirdach 1990 : ( 29c ))

14) 以下の ( i ) の用例もまた、優位条件の緩和プロセス ( 2 ) によって説明される。

- ( i ) a.\*[ What book ] did you persuade who [ to give ti to Bill ]? ( Pesetsky 1982 : p.617, ( 68a ))
- b.? [ What book ] did you persuade who [ to give ti to whom ]? ( Pesetsky 1982 : p.617, ( 68b ))
- c.\*Whati does Mary expect [ who to buy ti ] for Bill ]? ( Pesetsky 1982 : p.617, ( 69a ))
- d.?Whati does Mary expect [ who to buy ti ] for whom ]? ( Pesetsky 1982 : p.617, ( 69b ))

優位条件の緩和プロセス ( 2 ) の適用条件として、統語移動する Wh 要素とより左方の Wh-in-situ 要素の間に喚情的要素 ( Affective Element ) ( 否定要素 ( X<sup>0</sup>, XP ) と [ Only NP ] ) の介在不可が挙げられる ( Pesetsky ( 2000 ) これを介在効果 ( Intervention Effect ) と呼ぶ )

- ( ii ) a. Whati did who **not** give ti to whom? ( Pesetsky 2000 : p.66, ( 118a ))
- b.\*Whati **didn't** who give ti to whom? ( Pesetsky 2000 : p.66, ( 118b ))
- c. Whati did who say **no one** gave ti to whom? ( Pesetsky 2000 : p.66, ( 120a ))
- d.??Whati did **no one** say who gave ti to whom? ( Pesetsky 2000 : p.66, ( 120b ))
- e. Whati did who persuade **only Mary** to buy ti where ( Pesetsky 2000 : p.67, ( 123a ))
- f.??Whati did **only Mary** persuade whom to buy ti where ( Pesetsky 2000 : p.67, ( 123b ))

15) ( 63a-b ) の双方においてペア列挙の読みが許容される話者グループの存在も確認される。

( i ) の用例からも判明するように、当該グループにおいては、後述する心理動詞の派生が一般的にペア列挙の読みを許容する ( 当該グループに関しては、稿を改めて検討する )

- ( i ) a.¿A quién molesta cada ruido? [ <sup>ok</sup>Pair-list ]( Gutiérrez Rexach 1995 : ( 19a ))  
whom annoys every noise  
' Who did every noise annoy? '
- b.¿Qué molestó a cada estudiante? [ <sup>ok</sup>Pair-list ]( Gutiérrez Rexach 1995 : ( 19b ))  
what annoyed every student  
' What annoyed every student? '

Gutiérrez Rexach ( 1995 ) が挙げる以下のフランス語用例 ( ii ) もまた、興味深い。Quantifier ( *chaque* “ every, each ” ) と Quantifier ( *chacun* “ each ” ) で異なる分布が観察される。前者の Quantifier ( *chaque* ) が生起する用例は、対応する英語の Quantifier ( *every* ) の用例と同様の判断が下される。その一方で、Quantifier ( *chacun* ) が生起する ( iid ) では、ペア列挙の読みを許容する ( これは、( iia-b ) と対比すべきものである )。この場合、( iid ) における Spec( AgrO ) が Scope Position として機能すると考える必要がある。同様の相違は、イタリア語の Quantifier ( *ogni* “ every ” ) vs. Quantifier ( *ciascun* “ each ” ) と英語の Quantifier ( *every* ) vs. Quantifier ( *each* ) でも観察される ( iii-iv )

- ( ii ) a. Quel étudiant a lu **chaque** livre? [ \*Pair-list ]( Gutiérrez Rexach 1995 : ( 28a ))

- ‘ Which student read each book? ’
- b. Qui a lu **chaque** livre? [ <sup>77</sup>Pair-list ]( Gutiérrez Rexach 1995 : ( 28a ) )  
 ‘ Who read each book? ’
- c. Quel livre/Qu' a lu **chaque** étudiant? [ <sup>ok</sup>Pair-list ]( Gutiérrez Rexach 1995 : ( 28c )( 28d ) )  
 ‘ Which book/What did each book read? ’
- d. Quel étudiant/Qui a lu chacun des livres? [ <sup>ok</sup>Pair-list ]( Gutiérrez Rexach 1995 : ( 28d )( 28e ) )  
 ‘ Which student/Who read each of the books? ’
- ( iii ) a. Chi ha letto **ciascun** libro? [ <sup>ok</sup>Pair-list ]( Beghelli 1997 : fn.17, ( i ) )  
 ‘ Who has read each book? ’
- b. Chi ha letto **ogni** libro? [ \*Pair-list ]( Beghelli 1997 : fn.17, ( ii ) )  
 ‘ Who has read every book? ’
- c. A chi hai mostrato **ciascun** libro? [ <sup>ok</sup>Pair-list ]( Beghelli 1997 : fn.17, ( iii ) )  
 ‘ To whom have you shown each book? ’
- d. A chi hai mostrato **ogni** libro? [ <sup>79</sup>Pair-list ]( Beghelli 1997 : fn.17, ( iv ) )
- ( iv ) a. Who read **each** book? [ <sup>ok</sup>Pair-list ]( Beghelli 1997 : ( 78a ) )
- b. Who read **every** book? [ \*Pair-list ]( Beghelli 1997 : ( 78b ) )
- c. Who did you assign **each** book to? [ <sup>ok</sup>Pair-list ]( Beghelli 1997 : ( 78c ) )
- d. Who did you assign **every** book to? [ <sup>79</sup>Pair-list ]( Beghelli 1997 : ( 78d ) )
- 16) この論法が妥当する場合、二重目的語構文において優位条件の緩和プロセス(1)が関与しないことになる(ia, ib)。さらに、(ic)の予測も可能となる(未検証)。
- ( i ) a. Which girl did the boy give what book?  
 b.\*Which book did the boy give which girl?  
 c.\*Who gave the boy what?
- 17) この論法が妥当する場合、以下の予測が可能となる(未検証)。主語要素の生成位置は目的語要素の生成位置をC統御するが、与格構文等に生起するPPをC統御することはない点に留意されたい。
- ( i ) a.\*I need to know who voted for how many people  
 b.\*I need to know who introduced Mary to how many people  
 c. I need to know who introduced how many people to Mary
- 18) 本稿では、以下の(ic)と(iic)のような優位条件の緩和プロセスについての言及は割愛した。これは、Matrix CP内のWh要素とEmbedded CP内のWh-in-situとのペアが優位条件を満たすことにより発動するプロセスである(二重下線がペア形成を表す)。例えば(ic)において、Matrix CP内のW要素(*who*)のScope PositionがEmbedded CP内のWh-in-situ要素(*who*)のScope PositionをC統御する((ib)のペアは、(ia)とそれと同様に、優位条件の要請を満たさない)。(iii)の用例は、Matrix CP内のWh要素とのペア形成がEmbedded CP内の指示的なWh要素の限定されることを物語ると思われる。
- (iv)においても、類似の緩和プロセスが適用される。(iva)の非文性が示すように、*if*と*whether*はWh-in-situをライセンスしない。しかしながら、このライセンスは、Matrix CP内のWh要素によって代行される(ivb)。

- ( i ) a. \*Bill wonders what who bought ( Lasnik and Saito 1992 : p.119, ( 67 ) )  
 b. \*Who wonders what who said ( Lasnik and Saito 1992 : p.118, ( 66 ) )  
 c. Who wonders what who said ( Lasnik and Saito 1992 : p.119 )  
 d. ?Who said that who left? ( Lasnik and Saito 1992 : p.126, ( 95 ) )
- ( ii ) a. \*I know what who said? ( Stroik 1996 : p.77, ( 5a ) )  
 b. \*Who knows what who said? ( Stroik 1996 : p.77, ( 5a ) )  
 c. Who knows what who said?
- ( iii ) a. \*Who remembers what we bought why/how? ( Kuno & Takami 1993 : p.89, ( 45a ) )  
 b. Who remembers what we bought for what reason/in what manner?  
 ( Kuno & Takami 1993 : p.89, ( 45b ) )  
 c. Who thinks Mary left for which reason? ( Hornstein & Weinberg 1995 : fn.7 )  
 d. Who believes that John dropped what? ( Hornstein & Weinberg 1995 : ( 13a ) )  
 e. \*Who believes that John dropped the ball why? ( Hornstein & Weinberg 1995 : ( 13c ) )
- ( iv ) a. \*I wonder whether/if Bill bought what? ( Hornstein 1995 : p.151, ( 106b ) )  
 b. ?Who wonders whether John bought what? ( Lasnik and Saito 1992 : p. 201, fn.21 )

以下の ( va ) で例証されるように , Matrix CP 内の主語 Wh 要素と Embedded CP 内の同じ主語 Wh-in-situ のペア形成が排除される話者グループの存在が確認される ( Lasnik and Saito ( 1992 ) では , このタイプのペア形成が基本的に容認される ( id ) )。この場合でも同様に , 異なる格表示の Wh 要素とのペア形成が派生を救済することになる。

- ( v ) a. \*Who said that who liked Mary ( Pesetsky 1982 : p.621, ( 78a ) )  
 b. ?Who said that who liked who ( Pesetsky 1982 : p.621, ( 78b ) )  
 c. \*We're trying to find out which man said that which woman was in love with him  
 ( Kayne 1983 : ( 30 ) )  
 d. ?We're trying to find out which man said that which woman was in love with which boy  
 ( Kayne 1983 : ( 31 ) )

## 参考文献

- Aoun, Joseph and Yen-hui Audrey Li ( 1989 ) " Scope and Constituency, " *Linguistic Inquiry* 20-2, 141-172.  
 Aoun, Joseph and Yen-hui Audrey Li ( 1993 ) *Syntax of Scope*, MIT Press, Cambridge, MA.  
 Aoun, Joseph and Yen-hui Audrey Li ( 2003 ) *Essays on the Representational and Derivational Nature of Grammar*, MIT Press, Cambridge, MA.  
 Barss, Andrew ( 2000 ) " Minimalism and Asymmetric Wh-Interpretation, " *Step by Step*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, MIT Press, Cambridge, MA.  
 Beghelli, Filippo ( 1997 ) " The Syntax of Distributional and Pair-List Readings, " *Ways of Scope Taking*, ed. by Anna Szabolcsi, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.  
 Belletti, Adriana and Luigi Rizzi ( 1988 ) " Psych-Verbs and  $\theta$  Theory, " *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 291-352.  
 Bolinger, Dwight ( 1978 ) " Asking more than one thing at a time, " *Question*, ed. by Henry Hiz, 107-150, Reidel, Dordrecht.  
 Bošković, Željko ( 1997 ) " On Certain Violations of the Superiority Condition, AgrO, and Economy of Derivation, " *Journal of Linguistics* 33, 227-254.

- Bošković, Željko (1998) "Multiple Wh-Fronting and Economy of Derivation," *Proceedings of the 16th West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. by Emily Curtius, James Lyle, and Gabriel Webster, 49-63, Stanford, Calif. : CSLI Publications.
- Bošković, Željko (1999) "On Multiple Feature Checking : Multiple Wh-Fronting and Multiple Head Movement," *Working Minimalism*, ed. by Samuel David Epstein and Norbert Hornstein, 159-188, MIT Press, Cambridge, MA.
- Bošković, Željko (2000) "Sometimes in [ Spec, CP ] Sometimes in Situ," *Step by Step*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 53-88, MIT Press, Cambridge, MA.
- Bowers, John (1987) "Extended X-Bar Theory, the ECP and the Left Branch Condition," *Proceedings of the 6th West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. Megan Crowhurst, 47-62, The Stanford Linguistic Association.
- Brody, Michael (1995) *Lexico-Logical Form : A Radical Minimalist Theory*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Cheng, Lisa L. S. and Hamilda Demirdash (1990) "Superiority Violations," *MIT Working Papers in Linguistics* 13, ed. by Cheng, Lisa L. S. and Hamilda Demirdash, 27-46, MIT, Cambridge, MA.
- Chierchia, Gennaro (1992) "Functional WH and Weak Crossover," *Proceedings of the 10th West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. Dawn Bates, 75-90, Stanford, Calif. : CSLI Publications.
- Chierchia, Gennaro (1993) "Questions with Quantifiers," *Natural Language Semantics* 1, 181-234.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries : The Framework," *Step by Step*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivations by Phase," *Ken Hale : A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, MIT Press, Cambridge, MA.
- Cinque, Guglielmo (1995) *Italian Syntax and Universal Grammar*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Collins, Chris (1997) *Local Economy*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Comorovski, Ileana (1996) *Interrogative Phrases and the Syntax-Semantics Interface*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht/Boston/London.
- Contreras, Heles (1986) "What does everybody want?" *A Festschrift for Sol Saporta*, ed. by Michael Brame, Heles Contreras, and Frederick J. Newmeyer, Noit Amrofer, Seattle.
- Erteschik-Shir, Nomi (1997) *The Dynamics of Focus Structure*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Fanselow, Gisbert (1990) "Scrambling as NP-Movement," *Scrambling and Barriers*, ed. by Günther Grewendorf and Wolfgang Sternefeld, 113-140, John Benjamins, Amsterdam and Philadelphia.
- Fiengo, Robert (1980) *Surface Structure : The Interface of Autonomous Components*, Harvard University Press, Cambridge, MA.
- Fiengo, Robert, Cheng-Teh James Huang, Howard Lasnik, and Tanya Reinhart (1988) "The Syntax of Wh-in-situ," *Proceedings of the 7th West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. by Hagit Borer, 81-98, Stanford, Calif. : CSLI Publications.
- Franco, Jon and Susana Huidobro (2003) "Psych Verbs in Spanish Leísta Dialects," *Linguistic Theory and Language Development in Hispanic Languages*, ed. by Silvina Montrul and Francisco Ordóñez, 138-157, Cascadilla Press, Somerville.
- Freidin, Robert (1995) "Superiority, Subjacency, and Economy," *Evolution and Revolution in Linguistic Theory*, ed. by Héctor Campos, and Paula Kempchinsky, 138-167, Georgetown University Press, Washington, D. C.
- Guimarães, Maximiliano (2003) "Effects of Shared Constituency on Superiority Effects," *Proceedings of the 22nd West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. by Gina Garding and Mimu Tsujimura, 231-244, Cascadilla Press, Somerville.
- Gutiérrez Rexach, Javier (1995) "The Scope of Universal Quantifiers in Spanish Interrogatives," *Grammatical Theory and Romance Languages*, ed. by Karen Zagona, 87-98, John Benjamins, Amsterdam.

- Haider, Hubert (2000) "Towards a Superior Account of Superiority," *WH-Scope Marking*, ed. by Uli Lutz, Gereon Müller and Arnim Stechow, 231-248, John Benjamins, Amsterdam.
- Hornstein, Norbert (1995) *Logical Form: From GB to Minimalism*, Blackwell, Oxford.
- Hornstein, Norbert (1999) "Minimalism and Quantifier," *Working Minimalism*, ed. by Samuel David Epstein and Norbert Hornstein, 45-75, MIT Press, Cambridge, MA.
- Hornstein, Norbert (2001) *Move! : A Minimalist Theory of Construal*, Blackwell, Oxford.
- Hornstein, Norbert and Amy Weinberg (1987) "Superiority and Generalized Bonding," *NELS* 17, 311-324.
- Hornstein, Norbert and Amy Weinberg (1995) "The Empty Category Principle," *Government and Binding Theory and the Minimalist Program*, ed. Gert Webelhuth, 241-296, Blackwell, Oxford.
- Huang, Cheng-Teh James (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*, Doctoral dissertation, MIT.
- Huang, Cheng-Teh James (1995) "Logical Form," *Government and Binding Theory and the Minimalist Program*, ed. Gert Webelhuth, 125-175, Blackwell, Oxford.
- Ishii, Toru (2000) "The Minimal Link Condition and the Theory of Movement," *English Linguistics* 17, 305-329.
- Jackendoff, Ray (1990) "On Larson's Treatment of the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 21, 427-456.
- Jaeggli, Oswald (1982) *Topics in Romance Syntax*, Foris, Dordrecht.
- Jaeggli, Oswald (1988) "ECP Effects as LF in Spanish," *Advances in Romance Linguistics*, ed. by David Birdsong and Jean-Pierre Montreuil, Foris, Dordrecht.
- Jaeggli, Oswald (1991) "Head Government in LF-Representations," *Logical Structure and Linguistic Structure : Cross-Linguistic Perspectives*, ed. by C.T. James Huang and Robert May, 79-109, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Kayne, Richard (1983) "Connectedness," *Linguistic Inquiry* 14, 223-249.
- Kayne, Richard (1984) *Connectedness and Binary Branching*, Foris, Dordrecht.
- Kayne, Richard (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Kim, Young-Joo and Richard Larson (1989) "Scope Interpretation and the Syntax of Psych-Verbs," *Linguistic Inquiry* 20, 681-688.
- É. Kiss, Katalin (1993) "WH-Movement and Specificity," *Natural Language and Linguistic Theory* 11, 85-120.
- Kitahara, Hisatsugu (1997) *Elementary Operations and Optimal Derivations*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Koster, Jan (1987) *Domains and Dynasties*, Foris, Dordrecht.
- Kuno, Susumu and Jane F. Robinson (1972) "Multiple Wh Questions," *Linguistic Inquiry* 3, 463-487.
- Kuno, Susumu and Ken-Ichi Takami (1993) *Grammar and Discourse Principles: Functional Syntax and GB Theory*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Larson, Richard (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- Lasnik, Howard and Mamoru Saito (1992) *Move : Conditions on Its Application and Output*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Lasnik, Howard (1999) *Minimalist Analysis*, Blackwell, Oxford.
- Lewis, John D. (1999) "On Multiple Wh-questions : Weak Crossover, D-Linking, and the Third Wh-Phrase Effect," *Proceedings of the 18th West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. by Sonya Bird, Andrew Carnie, Jason D. Haugen, and Peter Norquest, 312-324, Cascadilla Press, Somerville.
- Mahajan, Anoop (1990) *The A/A-Bar Distribution and Movement Theory*, Doctoral dissertation, MIT.
- May, Robert (1985) *Logical Form*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Müller, Gereon (1995) *A-Bar Syntax : A Study in Movement Types*, Mouton de Gruyter, Berlin.

- Pesetsky, David, ( 1982 ) *Paths and Categories*, Doctoral dissertation, MIT.
- Pesetsky, David, ( 1987 ) " Wh-in-situ: Movement and Unselective Binding, " *The Representation of ( In ) definiteness*, 98-129, MIT Press, Cambridge, MA.
- Pesetsky, David, ( 1995 ) *Zero Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Pesetsky, David, ( 2000 ) *Phrasal Movement and Its Kin*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Pica, Pierre and William Snyder ( 1995 ) " Weak Crossover, Scope, and Agreement in a Minimalist Framework, " *Proceedings of the 13th West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. by Raul Aranovich, William Byrne, Susanne Preuss, and Martha Senturia, 334-349, Stanford, Calif. : CSLI Publications.
- Reinhart, Tanya ( 1981 ) " A Second COMP Position, " *Theory of Markedness in Generative Grammar*, ed. by Adriana Belletti, Luciana Brandi, and Luigi Rizzi, Scuola Normale Superiore di Pisa, Pisa.
- Reinhart, Tanya ( 1998 ) " Wh-in-situ in the Framework of the Minimalist Program, " *Natural Language Semantics* 6, 29-56.
- Richards, Norvin ( 1997 ) *What Moves Where in Which Language?*, Doctoral dissertation, MIT.
- Richards, Norvin ( 1998 ) " The Principle of Minimal Compliance, " *Linguistic Inquiry* 29, 599-629.
- Richards, Norvin ( 1999 ) " Featural Cyclicity and the Ordering of Multiple Specifiers, " *Working Minimalism*, ed. by Samuel David Epstein and Norbert Hornstein, 127-158, MIT Press, Cambridge, MA.
- Saito, Mamoru and Naoki Fukui ( 1998 ) " Order in Phrase Structure and Movement, " *Linguistic Inquiry* 29, 439-474.
- Sloan, Kelly ( 1989 ) " Quantifier-Wh Interaction, " *MIT Working Papers in Linguistics* 15, ed. by Lisa L. S. Cheng and Hamida Demirdache, 219-237.
- Stroik, Thomas ( 1990 ) " Adverbs as V-Sisters, " *Linguistic Inquiry* 21, 654-299.
- Stroik, Thomas ( 1990 ) " English wh-in-situ Constructions, " *Linguistic Analysis* 22, 133-153.
- Stroik, Thomas ( 1995 ) " Some Remarks on Superiority Effects, " *Lingua* 95, 239-258.
- Stroik, Thomas ( 1996 ) *Minimalism, Scope, and VP Structure*, SAGE Publications, London/New Delhi.
- Szabolcsi, Anna ( 1997 ) " Quantification in Pair-List Readings, " *Ways of Scope Taking*, ed. by Anna Szabolcsi, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Uriagereka, Juan ( 1998 ) *Rhyme and Reason : An Introduction to Minimalist Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Uriagereka, Juan ( 1999 ) " Multiple Spell-out, " *Working Minimalism*, ed. by Samuel David Epstein and Norbert Hornstein, 251-282, MIT Press, Cambridge, MA.
- Uribe-Etxebarria, María ( 1995 ) " On the Nature of SPEC/IP and Its Relevance for Scope Asymmetries in Spanish and English, " *Contemporary Research in Romance Linguistics*, ed. by Jon Amaste, Grant Goodall, Mario Montalbetti, and Marianne Phinney, 355-366, John Benjamins, Amsterdam.
- Williams, Edwin ( 1986 ) " A Reassignment of the Functions of LF, " *Linguistic Inquiry* 17, 265-299.
- Williams, Edwin ( 1988 ) " Is LF Distinct from S-Structure? A Reply to May, " *Linguistic Inquiry* 19, 135-246.